

55歳からの挑戦<ABCからのスタート>

English Language Mattersの日本担当コーディネーター・小林（28歳）が、退職後に、ダニーデンで英語の勉強に励んで5年目という、人生の大先輩であり、ダニーデン生活でも先輩であるAさん（67歳）にインタビュー。英語との格闘のこと、ダニーデンでの生活のこと、学校のことなど2時間に渡ってお話ししていただきました。同じ東北出身！本音でトークです。

■Aさんプロフィール

昭和27年生まれ。東北出身。

30年間、教育関係の仕事をされたあと、単身、ダニーデンへ。5年目を迎えてさらなる目標・夢に向かってまい進中。趣味は音楽・絵画鑑賞。

■小林友美プロフィール

昭和54年生まれ。東北出身。

English Language Matters 日本担当コーディネーター。某音楽大学卒業後、広告代理店、教育関係の仕事を経てワーキングホリデーでニュージーランドへ。夢は日本語教師。趣味は音楽鑑賞、ビリヤード。

小林（以下、K）：ご出身と日本でのご職業をお伺いしてもよろしいでしょうか。

Aさん（以下、A）：出身は東北の片田舎です。人口9万人ほどの市でしたが、山に囲まれた静かなところ。30年以上、教育関係の仕事に携わっていました。

K：お仕事を退職されてすぐにダニーデンへ来られたのですか。しかもご自身の人生で初めての海外だとか。

A：ええ、初の海外です。退職を待ち望んでいた、ってところもあって、ほとんど間を置かずに来ました(笑)。

「50年間あたたため続けた西洋文化へのあこがれ」

K：なぜ海外で生活されようと思われたのですか。

A：幼少のころ、12、3歳でしょうか、教会から流れてくる音楽を外からこっそり聴いていたんです。その美しさといったらありませんでした。同じ頃、海外の映画も観るようになりました。ハリウッドものでしたけどね。それから自分の興味がどんどんと西洋の文化や芸術に向いていったんです。映画に出てくる女優さんの衣装、日本にはない真っ白い壁のおうち、音楽、絵画…。農家の生まれだった私にとってはその世界は

180度違っていた。すべてがあこがれだったんです。そのあこがれが50年の間にどんどん膨らんで、行きたくてしょうがなかったんです。だから退職を機に思い切って生活してみようと思いました。

K：もっと若いうちに旅行で行こうとは思われなかったのですか。

A：そんな状況じゃありませんでした。仕事は週に一度休めればいい方、「2、3週間、海外行ってきま〜す」なんて簡単に言えません。昔の人間ですしね。だから小林さんみたいな人がうらやましいとも思います。若いから何でもチャレンジできる。「時代が時代なら！悔しいっ！」って思うときもありますよ(笑)。

「決め手はスコットランド。選んで大正解！」

K：いやいやいや(笑)。ではダニーデンを選ばれたきっかけは。

A：退職してから、英語圏の国7カ国について書かれたありとあらゆる本を読んで調べたんです。どの国のどんな都市が自分に合っているのか知りたくて。「数ヶ月で帰ろう」なんて思いませんでしたからね、悔いのないように念入りに下調べしたんです。トロピカルな国だと、生活するにはちょっと…って思ったり、都市は便利でいいけど、この年だから疲れそうだなって思ったり。自分の生まれ育ったところに似ている場所がいいな、と。そうしたらダニーデンが出てきたんです。人口が12万人くらいでしょ。私の地元と同じくらい。それと、何よりも、スコットランドの建物や文化が根付いているってところが決め手でしたね。スコットランドの音楽が大好きだったから。

K：なぜスコットランドではなくニュージーランドだったのですか。

A：治安の良さですね、やっぱり年だから(笑)。スコットランドが悪いのではなくてね。あとは物価など生活する上でかかせないマナーのね、ほら(笑)。

「日常生活のなかで、十分に喜びを見出せる場所」

K：(笑)。実際に生活されていかがですか。違うところにすればよかったとは思いませんでしたか。スコットランドの方が良かったかな、とか。

A：私、5年間ダニーデンから出たことがないんですが、結論から言うと、大正解でした。だから5年もいるんでしょうね(笑)。到着して初めて街を歩いたとき、ストリートミュージシャンって言うのかな、小さい子が

ストリートでバイオリンを弾いていたんです。人生で初めて見たんですよ！生で！しかもクラシック！日本の田舎じゃ絶対見られない。「ああ、これだ〜！！」って思いましたね(笑)。それに、建物のきれいなことってありませんよ。金の採掘で栄えたときにニュージーランドの首都だっただけあって、その頃に作られた建物の荘厳さとそれがまだ残っていることの素晴らしさ。文化遺産が今も生活の一部みたいに自然と息づいている。すごいことですよ。パイプオルガンだって気軽に聴けちゃうし、至るところに「芸術」がある。そういう街の雰囲気が大好きです。

それにね、建物のレンガとレンガの間の線って見たことありますか。白だったり赤だったりするんですよ。小さいことなんですけど、それだけで印象がガラリと変わってしまうんですよ。レンガかコンクリートかでも違うのに。特に私は日本人だしあこがれも強かったから、そういう細かなところを見てしまうんですが、生活してなかったらわからないことじゃないですか。だからいろいろひくくめて、私にとってダニーデンは十分に喜びを見出せる場所なんです。

「街の人みんな、『仲間』や『友だち』という感覚」

K：人々はどうですか。

A：一言で言って、フレンドリーですよ。たとえば街を歩いていて、小さい子や年配の方まで、目が合うと「にこっ」って笑うんですよ。はじめは、「え？この人知ってる人だった？」って思いましたけど、そうじゃないみたいで(笑)。それが自然、普通なんですよ。バスに乗ったときも運転手さんが降りるときに「Have a nice day!」って言ってくれる。「いらっしやいませ」「ありがとうございました」に慣れていた私にとって、それは衝撃というか、お客様や外国人じゃなくて「仲間」や「友だち」なんですよ。ここに存在している、それだけで繋がっているんです。これは私の見方の違いかもしれませんが。

K：私も同じ意見です。みんなが話したくてうずうずしているって思いませんか。日本だと「言わなくてもわかってくれる」というのがあるけど、こっちは「話さなきゃわからない」というのがある。ときどき、一人で歩いている人が思い出し笑いみたいに笑っているんですよ、一人なのに(笑)。そういうのを見ると、感情がすぐに表に出て分かりやすいな、って思います。ちょっ

とは我慢しているみたいですけどね(笑)。

A：日本人は相手のことばかり知りたがって、自分のことは話さない気がしますよね。それは自分のことを隠すから。隠すから相手も知りたがって、探り合う。探り合っている間に変な方向に話が進んだり。きっと一人で歩いて笑っている人に「なんで笑ってるの？」って聞いたら、こっちは人はすぐにいろんなこと話そうとするんじゃないかな(笑)。

「『リラー———ックス！！』が合言葉？」

K：思い切って今度聞いてみます(笑)。生活面での違いを感じたことは。

A：たくさんありますね。まず、男性が主夫をしていること。私の時代の人間はまず考えられない。奥さんがフルタイムで働いて、旦那さんが家事をする。最初のホームステイファミリーがそうだったんです。私以外に2人の子をホームステイに迎えていて、いつも7人で夕飯を食べていました。終わると決まってソファに座ってテレビを観る。その間、食器は全部そのまんま。もう気になって気になって(笑)。それで私が手を出そうとすると「リラー———ックス！！」って声が飛んでくるんです。それから夜の10時くらいにいそいそと洗い出す。またそれを手伝おうとすると「This is my job!」と言われる。プライドをもって主夫をしているというか、それが当たり前。仕事に上下関係がない。あとは、たとえば物を落としたり、こぼしたりすると、日本だと慌てて片付けようとするし、特に他人様の家だからってすごく申し訳ない気持ちになるじゃないですか。でもね、私のホストファミリーは「Never mind!」なんですよ。家庭が家庭だからかもしれませんが、本当に気にしない。

K：私のホームステイ先もフラットもそうでした。あとで掃除機かけるから、適当に拭いておいて、って(笑)。

A：だから、私自身もいちいちいろんなことを気にしないでいいんです。日本だと外見から気にしなきゃいけない。それはそれでいいことだけど、気持ちが落ち着かない。いつも人の目を気にしてしまう。そうじゃなくて、「リラー———ックス！！」すればいい。それがこの国の生活の根底にあるんだと思います。生活する上で、何よりもまず自分の気持ちに素直でいればいいんだと。

「英語がわかったら自分のペースがつかめた」

K：楽しかったこと、つらかったことなどは。

A：どちらにおいても、語学力ですかね。ABCからのスタートだったので…。今思えば、やっぱり英語がわからなかった日々はそれだけでつらかった。最初の3年間は「ホームステイ、学校、図書館」が私の世界でした。宿題で出されたプリント1枚にあるわからない単語を調べるだけで4時間。だから内容の理解までいわずに次の日が来る。ずっと緊張状態で、日中は食べ物が喉を通らないときもありました。でも夜になると食べなくなるんです(笑)。それこそ「リラックス」できるから。英語がわかるようになったのは、3年過ぎたあたりから。自分の英語が相手に通じるようになって、こっちも相手の話が5, 60%わかれば理解できるようになった。はじめは3年で帰ろうって思って周りの人にも約束していたんです。でも、3年半経って、一度、日本に帰ったとき「やっぱりもう少し海外にいたい」って言いました。もちろん親戚中から反対を受けました。それを押し切ったのは、「せっかくここまでやったのに！」っていう意地ですよ。ね。「もったいない、英語もわかってきて、これから楽しくなるはずなのに」そう思いました。それで日本から戻ってきてフラット生活に切り替えたら、自分のペースで生活できるから、好きなことを思う存分楽しめるようになった。結果的に自分の判断は間違っていなかったって思いますね。

K：フラットとホームステイはどちらがいいですか。

A：ホームステイはKIWIの生活がわかっていいですよ。それにいろいろと準備してくれますから、慣れないうちは絶対にホームステイをオススメします。でも、ホストファミリーと生活リズムを合わせるから、自分で好きなところに行ったりするのは少し難しいかな。その点、フラットは自分の責任です。自分の好きな時間に好きなことができる。私の場合は、英語力がついてきたからそう思えるのかもしれませんが。

「コミュニケーションを大切にしている学校」

K：現在、通われている学校「English Language Matters」についてお伺いしたいのですが。

A：とても気に入っていますって書くと、読まれている方は「ほんど？」って思われたりするんでしょうね(笑)。

K：ええ、そう思います(笑)。

A：でもね、本当に気に入っていて、一番いいのは、先生たちがこれまたフレンドリー！どんなレベルの生徒にも毎日声をかける。それが自分の生徒じゃなくても。「元気？」「楽しんでる？」って。この年になると、「学

校の職員室」っていうものに抵抗があるんですけど、この学校にはいわゆる職員室が存在しない。先生に用があるときは、探す。いろんな人に声をかけて探す(笑)。すぐ見つかりますけど。学校自体が狭いから、若い子たちでいっぱいになると、ちょっとうるさいなあ、って思いますけど、その狭さがよかったです。「袖ふれあうも多少の縁」じゃないですけど、ちょっと肩がふれあうと「あら、ごめんなさい。元気？」という具合に、会話がはじまる。そうすると気持ちが前に行くじゃないですか。言葉は気持ちですよ。伝えたい気持ちがないと言葉は意味を持たない。それが授業に生きる。先生たちはどの生徒にも平等に声をかけていて、そうやって勇気付けてくれる。生徒と先生のコミュニケーションの取り方が上手な学校ですね。思えば、授業がはじまる前に校内で話さなかった日はないですね。必ず先生とあいさつがあって、終わってから話していますね。授業では引込み思案な子でも休憩時間などに先生と話すときは笑っていますからね。

K：授業はいかがですか。

A：クラスの国籍がミックスされているのがいいですね。だから、考え方や物の見方がそれぞれ違っていろいろな意見が飛び出す。年齢も違いますからね、すごく新鮮。授業内容でいくと、「Reading, Listening, Speaking, Writing」の4つをバランスよく取り入れています。たとえばSpeakingが不得意でも、Listeningがよかったら、授業中に凹みっぱなしってことにはならないでしょう。今日はずっとSpeakingを勉強するってことはまずない。英語の学習に必要な要素を包括して、その上で個々の生徒が苦戦している分野を見極めて教えてくれます。それもこれも、生徒とのコミュニケーションが上手に取れているからできることじゃないですかね。

「英語は続けるだけでも価値がある」

K：教育関係のお仕事をされていたAさんだからこそ気づかれる点でもありますね。それでは、今後の目標や夢は。

A：大きな夢になりますけど、ほかの英語圏に行って最低1年間は生活してみたいですね。旅行ではなくて、生活がしたいです。そうすることで英語や人々の違いがわかると思うので。

K：英語の違いですか。

A：日本にも方言があるように、英語にも方言がある。それが国を越えているからおもしろい。英語がわかっ

てきて興味がわいたことのひとつです。

K：Aさんならその夢も叶えられるのでは。ダニーデンで現実的に達成させたいことは。

A：英語にかかわりのある仕事に就きたいと思っています。最初はまったくそんなこと考えていなかったんですよ。でも、「せつかく5年もいてここまでやったのに！」ってやっぱり悔しくなっちゃって(笑)。欲が出てきましたね。英語はインターナショナルな言葉だから、世界が広がるでしょ。英語を学ぶのは続けるだけでも価値があること。だから、1, 2年でもいいから、就労ビザを取って少しでも長くいたいんです。

K：IELTSも受験されるとか。

A：ええ、ほんの1年前まで考えもつかないことでしたよ。まさか私が…ってね(笑)。やれるだけのことはやりたい！挑戦したい！と思うようになったんです。

「生活しないと本当のことはわからない」

K：その行動力、本当にすばらしいです。同じように海外で生活したいと思われている方やあこがれを抱いている方にメッセージがありましたらおねがいします。

A：こちらに来るとき「ニューヨーク？ニューギニア？ディズニーランド？どこに行くんだ？行ってどうするんだ？」と言われました。特に私の年の人は、ニュージランドのしかもダニーデンなんて誰も知らない。でも私はいろいろ調べて、ここがいいと思って来ました。来てみたら、最高でした。ここに来て初めて、西洋人ではない、アフリカや中東から来ている人たちに会いました。人口12万人の街なのに国際化されている。それだけでも価値がありますよ。そして生活してみないとそれには気づかなかったでしょう。50年間、日本の片田舎しか知らなかった私に世界を見せてくれました。そしてさらに大きな夢も与えてくれました。私は自分が選んだ街や生活に、自信とプライドを持っています。「ちょっとヒマだから旅行しよう」では得るものが少ないと思うんです。せつかくお金をかけるなら、少しがんばって長期的に同じ場所に滞在されることをオススメします。私みたいに数年もいる必要はないですよ(笑)。1週間なら2週間、2週間なら1ヵ月、少しでも長くいることに意義があると思います。それに、ただ行きたいからじゃもったいない。下調べして、あこがれをどんどん膨らませて、それで現実と比較する。そうしたほうがおもしろい。だから自分の意思で来てください。自分の力で体験したものが身につけば、

それが宝になります。みなさんも自分のオリジナル性を大切にきて来てください。

K：貴重なお時間をありがとうございました。このインタビューを通して、私の母と同じ世代のAさんの若さの秘訣を垣間見た気がします。私よりも若いですよ。

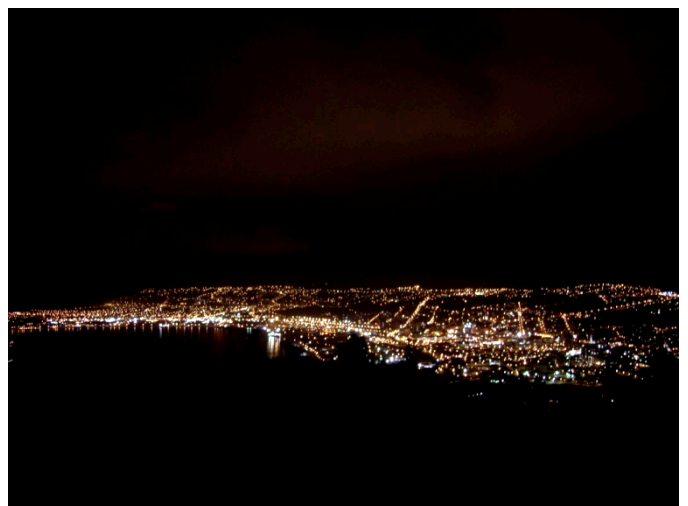
A：またあ！(笑)

K：本当ですよ。また今度いろいろとお話聞かせてくださいね、個人的に。

A：若い人とかうして話せるのも醍醐味のひとつですね。ぜひ、今度はお酒でも…。

K：ええ！ぜひ！！

2008年4月30日(水) 場所：RA Bar



夜景もきれいなダニーデン。Aさんは、南半球の星空、夏のクリスマス、家の造りなど、日本とまったく違う点がまた楽しいと話す